

総 括

サカモト ノブユキ
坂本 信道

ただ今をもちまして、第43回国際日本文学研究集会のすべてのプログラムが終了いたしました。この研究集会の企画・運営は国際連携委員会が行っておりますが、今年度、その委員長を勤めております京都女子大学の坂本信道です。今回も数多くのエントリーをいただき、限られた発表枠・展示枠の中、選考に苦慮する一面もございました。割愛した応募にも今後の展開が期待されるものもありましたので、次回以降の研究集会へのご参加をお待ちしております。

これはエントリーシート一般に言えることですが、内容をその根拠も含め、なるべく具体的に書いていただくと、審査の折に大変助かるということです。研究史の記述が中心になっていたり、研究予定あるいは希望的観測のみが記されていたりするものも少なからずあり、どのような発表や展示となるのか、予測がつかず、そのために選に漏れるばあいもあります。また、内容につきましても、発表向きなのか展示向きなのか、そのあたりのことも含めエントリーしていただくことが、ご自身の研究にとっても有益なのではないかと思われます。

前置きはこのくらいにして、二日間の総括を、プログラム順に述べたいと思います。なお、紙幅の都合で、個々の題目については省略いたしますので、当日のプログラムをご参照ください。

【第1セッション】(11月16日)

コモバ エカテリーナさんの発表は、『源氏物語』の夕顔と紫の上について、アフェクト理論と感情の共同体の理論とによる分析でした。作者が発信したも

のが読者の読みにどう還元されるのかは重要な問題ですが、それを平安時代の物語分析にはまだあまり援用されていない文学理論を用いて明らかにしようとする試みです。その有効性が今後さらに明らかにされることを期待します。

馬如慧さんは、「あざやか（なり）」を視点に、当該語が男性性・政治性を帯びた語であることを切り口として、『源氏物語』の登場人物を分析しました。正篇と続編での女性に対する使われ方の変化、男性への使用では皇統と臣下の対立という結果を導いた発表は、資料的的確な提示と手堅い論の運びで説得力のあるものだったと思います。

ジェルリーニ エドアルドさんは、昨年ショートセッションの発展延長として「文学遺産」という概念が、——たとえば「世界遺産」のように——成り立ちうるのか、ということについて、勅撰漢詩集の「序」は遺産言説であるということを示した上で、従来の静的研究から動的文学研究への階梯を示唆しました。文学はどういう形態で存在しうる（しえた）か、という問題でしょうか。

【ショートセッション】

今回の研究集会では、ショートセッションを一日目に集約し、五人の方の発表となりました。

グエン・ティー・トゥー フェンさんは、ベトナムにおける漢文訓読研究や漢文教育のそれぞれの現況について多くの知見を与えてくれました。論語の訓読について、日本でなされた訓読との比較や、ベトナムでは先行する注釈書に影響を受け注釈的性格を反映した訓読になっていることなど、興味深いものがありました。19世紀以降の比較的新しい資料が多いこと、未整理のために資料へのアクセスが困難なことなど、問題点の指摘も貴重でした。

マクネリー キンバリーさんは、男女の視点の差異から『栄花物語』と『大鏡』の歴史記述の方法について論じ、女性たちのもつ「裏の権力」の存在を指摘しました。後半の『土御門院女房日記』の分析では、散文語である「さぞかし」など型破りな語句が和歌に出現することを、従来の恋・離別・哀傷歌などの方法では、父後鳥羽院の不在（配流）を表現することが不可能だったゆえ、

と説明してくれました。

早川友実子さんは、アメリカにおける川端康成評が、ノーベル賞受賞を境にして日本文化の固有性とのかかわりで論じられることが多くなったことを指摘しました。川端文学の紹介者たちの立場の相違などを、アメリカの政治状況から具体的に分析し、戦後文学としてではなく冷戦文学としての読みの台頭など、翻訳と受容も政治的な問題と無関係ではないという視座からの発表でした。

駒居幸さんは、桐野夏生がトランスナショナルな枠組みの中でどのような分析をなされてきたか、オリエンタリズムという従来ありがちな東洋の文学としての受容でなく、世界文学として評価されてきたことを、犯罪性／ジェンダー／ポピュラー／ネオリベラリズムという四つの観点を循環させることで分析しました。桐野の作品が、日本研究と世界文学研究の二つの可能性を秘めていることの指摘であったと思います。

タッデイ マルコさんは、夏目漱石の初期作品『趣味の遺伝』には、夢幻性・探偵推理・日記・エッセイなど、その後の作品につながるさまざまな要素が内在しているとし、実験的な作品と位置づけました。「書斎物語」というべき要素があることを指摘していましたが、これは幼少期からの漢籍修養を通じ、文人たちから流れ込んだ、漱石と漢詩の問題、ひいては「英文学に欺かれたる感」と述べた作家漱石の深部につながっていく問題のように思われました。

【第2セッション】(11月16日)

第一日目の最後は、発表の第2セッションでした。

ビューニユ マガリさんは、金春禅竹の能の特色を、師の世阿弥の台本と比較し、古典からの詞章引用の際の選択の違いの検討を通じ、世阿弥の厳密さ、善竹の柔軟さを指摘しました。善竹の能台本のインターテキスト性の弱さを、「雲林院」を用いて具体的に取り上げ、その後の流派分派へのテキストの変遷を追跡したものです。

李澤珍さんの発表は、『伊曾保物語』が狂言伝書『わらんべ草』にどう受容されているかというものでした。序段の文脈と有機的に関連させて全段を読み

解くべきだとし、具体的には「鷺と蝸牛の事」に登場する鷺が何に比定されるか、当時の能楽界の動向と対応させて整理し、提示してくれました。江戸時代のイソップ寓話受容史にまで至る、幅の広い内容でした。

15分の休憩を二回挟み、長時間に及び発表が続きましたが、フロアからの質問であらためて気づかされることも多くありました。第一日はこれで終了し、引き続き行われた懇親会でも、時間内に収まりきれなかった質疑が、会場のあちこちで行われていました。こうした自在な意見交換もまた、発表会場での質疑と併せ、貴重なものであると感じます。

【第3セッション】(11月17日)

研究集会第二日目の午前中に、四人の発表が行われました。

生田慶穂さんは、現行の連歌百韻の注釈の「形式」の妥当性を問う意欲的な発表でした。連歌という文芸の形式が、通常の、一方向的な注釈の記述形式では不十分なのではないかというものです。明治期に連歌興行が途絶えたことも一因とし、連歌の制作過程も注に反映・再現しようとする試みです。切れ／付け／三つの文脈、という点から、より適切な注釈記述の方法の確立を目指すものであると思われました。

パッローネ クリスティアンさんは、洒落本『妓者呼子鳥』の「彫り物騒ぎ」「火の玉」「狂乱する女郎」などの趣向が、後の作品に広く受容されていったことを調査追跡し、江戸文学におけるインターテキスト性の一面を明らかにしてくれました。舌耕文芸も含めた文学史上のジャンルの枠組の再考を促すような発表であったと思います。

袁葉さんは、江戸時代の唐学研究グループである「訳社」の一員として名が見える「井伯明」が何者であるか、人名誌を使い、岡井黄陵との関連から解明しようとする実証的な試みでした。荻生徂徠の『譯文筌諦』と黄陵の近似から、伯明に比定できるのではとのことでした。後半は、荻生北溪の周辺と「訳社」構成員を検討し、当時の唐律・明律研究の状況についての考究を行いました。

柏原康人さんの発表は、香川県の覚城院の付法活動の状況を、細密な資料調

査から明らかにしようというものです。聖教の書写状況の調査により、「新安流」の道場としていこうとする活動を浮き彫りにし、住持僧の法流の伝承・変遷を緻密に跡づけていたと思います。こうした地方の基幹寺院の実態が、今後の研究でさらに明らかになることが期待されます。

【ポスターセッション】

二日目の昼休みの110分間に4つの展示・説明が行われました。昨年度に較べるとやや少なめですが、そのぶん、時間的にもゆったり説明を聞くことができたように思います。各ポスターは見やすいように工夫され、こうした発表形式も徐々に馴染みのあるものになってきた、という感を抱きます。ビジュアル化やカラー化など、見せる工夫を今後もさらに凝らしてもらいたいと思います。

パク ヨンソンさんは、横溝正史『執念』について、作者独自の「執念」の捉え方を説明・展示していました。金への執着は一見普遍的に思えますが、横溝のばあい、自分で貯めた金であることが特徴だと言います。同じ執着でも、勤勉に働いて貯めた金への執着としている点が、日本人固有の執着の基底にある価値観であり、現代にまで続いているという指摘が印象深かったです。

フォーリー アリシアさんは、現代のサブカルチャー研究の方法を、江戸時代の忠臣蔵研究で試みようとしています。忠臣蔵受容のひとつとして『忠臣蔵穴さがし柳樽』を取り上げ、その読み解きのため必要な、「穿ち」を理解するための知識が、現代のファン文化に見られるファン固有の知識——決して世間常識ではない——と通底するものがあるのではないか、というものでした。

楊琴さんは、「人間」という語の軍記物語での用例の調査から、世中・この世／ヒト、という意味の対立と変遷を語誌的に追究していました。「人間」なる語は、鎌倉時代以降（軍記では『平家物語』以降）、「ニンゲン」に固定化されていくということを説明してくれました。本年七月の日本文学協会第39回研究発表大会で「唱導文献」を対象にこの問題を追究しており、いずれ和漢の語彙比較の問題として集成されると思われます。

藤田絵里香さんは、坂口安吾の文体創出の試みを追跡し、「四人称」という独

特の方法、無形の説話者の設定を説明してくれました。偽りを真実に昇華させる「哲学の石」という「反写実」の方法が、安吾の小説観の根底に流れているというものでした。ドッベルゲンガーと文体の分身、ハイネやポーとの比較など、今後の拡がりも予定されているようです。

【特別講演】

さて、昼休みを終えた二日目の午後は、国際連携委員会からの招請を快諾いただいた、ゲイ ローリー早稲田大学法学学術院教授による講演でした。

柳沢吉保側室の正親町町子が記した『松蔭（松陰）日記』の英語訳を完成させたローリー先生の翻訳体験を通じて明らかにされる原著の特徴は、非常に興味深いものでした。公式な記録としての『楽只堂年録』の性格に対し、『松蔭（松陰）日記』に窺われる私的な性格、すなわち語り手の存在や物語的性格（作者町子が実見していないことが語り手により語られる）を、詳細にお話くださいました。『楽只堂年録』には、町子と吉保のプライベートなやりとりはいっさい載せられていないということで、書物としても相補い合う、さらに言えば『楽只堂年録』に静かに寄り添うような『松蔭（松陰）日記』のあり方に、作者町子のそこはかかない奥ゆかしさを感じたのは、わたくしだけでしょうか。

数多い和漢の古典の引用——『源氏物語』、勅撰和歌集、『論語』、『中庸』など——は、作品をどこまでも「京（みやこ）」に根ざすものとしており、また、「江戸（城・将軍）」の作品内での不在が顕著であるという指摘は、本作の本質を衝いたものであると感じました。翻訳にあたっては、町子が用いなかった「城」などのことばを、目的語としてかなり補う必要があったということであり、補わなければ意味が通じない、しかし、補えば作品の本質にも影響を与えかねないという、翻訳者としてのジレンマも窺うことができたように思います。

英語訳されている日本近世文学作品に、女性の作品が極度に少ないという現状も指摘され、さまざまところで性差というものの存在を痛感しました。

今回の英語への翻訳のきっかけとなったという、『松蔭（松陰）日記』の現代語訳、『柳沢家の古典学 松陰日記』の著者、宮川葉子先生も来場されており、

ひとつの文学の仕事が、あらたな別の文学の功を生み出したという現場に立ち会えた感があり、ひとりひとりの文学の力は小さなものだけれども、決して弱いものではなく、脈々と継承され、世界にさえ広がってゆく強靱なものだという認識をあらたにすることができました。

以上で、二日間の総括を終わらせていただきます。わたくしの理解不足による誤謬もあるかと存じますが、どうぞご海容を賜りますよう、お願いする次第です。

研究集会を閉じるにあたって、閉会の辞をとのことですので、委員長としてひとこと申し添えさせていただきます。

発表やポスター展示を行ってくださった方々、ご講演いただいたゲイ ローリー先生、この場に足をお運びくださった皆様、また、インターネットのライブ配信をご覧いただいた視聴者の方、どうもありがとうございました。企画・運営に携わってくださった資料館の方々、さまざまな事務を的確にこなしてくださった事務担当の皆様、その手腕とご尽力に深く感謝いたします。

今回の第43回をもちまして、国際日本文学研究集会は、昭和・平成・令和と三つの元号にわたり歴史を積み上げてきたことになりました。継続は力なりと申しますが、言うは易く行はるは難しであります。先学の方々の尽力なくしてはなし得なかったことでしょうし、また、今後も皆様のお力添えなくしては叶わぬことだと思えます。

なお、次回第44回の国際日本文学研究集会は、これまでと開催時期を変更し、より現代の研究環境に即したかたちであらたにスタートする予定です。現在、諸方面と協議・調整を行っております。詳細については、決定次第、国文学研究資料館ホームページなどでお知らせいたします。皆様のご意見を反映させながら、よりすぐれた研究集会として発展・継承させてゆきたいと考えておりますので、さらなるご協力・ご支持とともに、忌憚ないご批正を賜りますようお願いすることをもちまして、閉会の辞とさせていただきます。二日間、どうもありがとうございました。